

ペンシャワール会報

No.44

ペンシャワール会 〒810
一丁目一〇一五 福岡市中央区大名
電話・FAX 〇九二(七三二)一三三七二
上村第二ビル三〇七号



1994年度を振り返って

- | | |
|-------------------------|-------|
| ●繰返し出発点に戻る..... | 中村 哲 |
| ●チトラールの娘たち..... | 藤田千代子 |
| ●「幸せだから太ったんだよ」..... | 倉松由子 |
| ●二ヶ月の見聞で多くの必要性を痛感..... | 小幡順子 |
| ●今度は一人の医師として訪れてみたい..... | 永田高志 |
| ●着実に根をおろす PLS..... | 中村 哲 |

ザリーの絨緞屋*表紙絵 甲斐大策

ペンシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。
現地の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

繰り返し出発点に戻る

PLSが発足し現地基地として強固に

夢が現実化するまでは、それは美しい希望です。だが、ひとたび作為の思考が忍び込む瞬間から、変質の種子が宿ります。私たちの事業とて同様です。いかに遠回りに思えても、私たちは繰り返し自分の出発点に戻らねばなりません。

JAMS (日本-アフガン医療サービス) 顧問医師
PLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) 院長

中村 哲

1994年度を振り返って

一九九五年度を以て、ペシャワール会の活動は十二年目に入ります。毎年のせりふながら、事の多い一年でした。「コウベ」と「オウム」を経た日本もまたしかりです。しかし、現地ではPLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) の発足を以てペシャワール会の現地基地が置かれた画期的な年でした。「基地の完成に十一年もかけるのか」と問うむきもありますが、現地事情を知れば知るほど、問題の深さと広さが目につきます。

流動的という言葉はペシャワールには向きません。考えてみれば一時の小春日和りをのぞいて、流動的情勢が日常だったからです。ソ連のアフガニスタン侵攻からその解体まで、「イスラム革命」の勃興と変質まで、人々はある時は熱狂し、ある時は冷め、なにもものに翻弄されてきました。夢が現実化するまでは、それは美しい希望です。だが、ひとたび作為の思考が忍び込む瞬間から、変質の種子が宿ります。私たちの事業とて同様です。いかに遠回りに思えても、私たちは繰り返し自分の出発点に戻らねばなりません。

私たちの事業は「小さくとも美しく」、「空砲ではなく実弾」をモットーに進められてきました。実際には規模は決して小さくはないけれども、巨大なODA (政府開発援助) や国連の事業には比べべくもありません。しかし、現れては潰えていった多くの「国際救援事業」を見ると、自分たちの立場が多少分かるような気がします。変転するも

のの中に変わらぬものを見いだし、生きた人間の事実謙虚に對する限り、私たちは蛇のように忍び込む狂気や虚構、自己宣伝、不安の運動から自由であるでしょう。「一隅を照らす」という心もここにあります。

こうして「私たちのペシャワール」は、単なる援助を超え、苦楽の分かち合いを通して己を知る縁となってきたことを今更のように思います。さらに、戦後五十年の節目に当たり、私たちもまた戦争の歴史的負い目から逃れられぬことを強調したいと思います。不戦の誓いや謝罪は議論すべきものではなく、実行すべきものです。

一九九五年度も心を合わせ、力を尽くして現地事業を進めていきたいと思っています。



日本人スタッフそろっての回診風景

現地の一般情勢

一九九四年度も政情不安とインフレに悩まされた。ペシャワール会の現地活動は十一年を経過して大局的に一つの方向が明らかになった。特に北西辺境州のらいコントロール計画では、ペシャワール会自ら現地にPLS（ペシャワール・レプロシー・サービス）を開設して治療センターを成し、画期的な展開となった。アフガニスタン国内ではJAMS（日本アフガン医療サービス）がヌーリスタンに診療所を置くことにより、目標の「僻地医療」が本格化している。



らいの典型症状「うらきず」の治療をする PLS スタッフ

パキスタン北西辺境州・アフガニスタン情勢

パキスタンでは、人民党政権の下でインフレがさらに進み、人々は政治に対する期待を失った。伝統志向の強い北西辺境州では、ブットー政権の「親米・欧化政策」に対して人々は真つ向から反旗をひるがえしている。辺境自治区のバジヨウルでは武力衝突が繰り返された。一方でカシミールをめぐる緊張が続くと共に、アフガニスタンのカブールは依然権力の動向が不透明である。

旧難民の約四分の一、六十一八十万人が残っていると言われるが、かなりは地元に着定しており、残るキャンプは自立してコロニー化している。現在「難民」と呼び得るのは主にカブールからの都市避難民である。パキスタン政府はこの受け入れに消極的で、大部分はアフガニスタン側のジャララバード周辺でテント生活を強いられている。カイバル峠を越えてペシャワールまで来れる者は、少数の中産階級が多い。

アフガニスタンの首都カブールは、四年に及ぶ政争で瓦礫と化し、ここでも人々は全ゆる政治党派に幻滅した。九四年十月に活動を開始したタリバン（神学生）のグループも、数カ月間の天下に終わって、例外ではなかった。それでも、九五年四月からカブールは一時的な平和を得ている。庶民たちの帰還の動きも始まった。しかし、現在の静けさがいつまで続くかは誰も知らない。ただ言えるのは、もはや武器を以ては民衆の支持が得ら

れないことである。

パキスタン政府の国策は、難民をパキスタン領内から締め出し、混乱を回避することにあると思われる。パキスタン自身が国内の治安悪化に悩み、カラチなどの大都市は警戒厳令状態である。また、辺境自治区の反乱の背後にアフガン人がいるとされ、アフガン難民に対する風当たりが厳しい。加えてアラブ系NGO（非政府組織）によるテロ事件は、「外国NGO締め出し」の方針を強化させた。一九九五年二月、「アフガン難民のステータスは一九九五年八月を以て終了、全難民を早期に帰還させる」と発表された。当然、難民救援団体もいずればその法的根拠を失う時がくる。ペシャワール在住のアフガン人、とくににカブール出身者は浮足立っている。

大方の難民救援団体（約一六〇）は既にジャララバードに移っているが、政治的混乱で動きがつかず、実際の活動は周辺のカブール避難民キャンプに限られている。JAMSの医療活動は例外的である。しかし、カブールが平和になれば一斉に移動が始まるだろう。

北西辺境州らい根絶計画への協力

九四年度は、一九八四年以来最大の転機となった。それまでらいコントロール計画が依存してきたドイツの財政支援は五〇％削減、拠点診療施設は公営病院・ミッション病院らい病棟共に機能を停止、計画は誇大な「コントロール達成宣言」で暗礁に乗り上げていた。

ベシヤワール会は一九九四年十月、ドイツ側の要望もいれ、ミッション病院らい病棟を本格的に再組織しようと図ったが、病院当局の非協力でならなかった。そこで州政府関係者・ドイツ側(Marie Adelaide Leprosy Centre)と協議を重ねたうえ、ベシヤワール会独自にらいセンターを開設して北西辺境州の登録患者七〇〇〇名の合併治療、らい関係の全ての検査を一手に引き受けることが求められた。

一九九四年十一月、ベシヤワール会はミッション病院から引き上げ、独自の診療施設をベシヤワールに開いた。同年十二月八日、PREP (Peshawar-kai JAPAN, Rehabilitation Extension Programme) を州政府の社会福祉法人として登録し、ここにベシヤワール会独自の現地拠点を築くに至った。らいセンターはPLS (Peshawar Leprosy Service) の名で、PREP傘下の民間医療団体となった。

これは各方面の望むところで、今後現地らいコントロール計画の概要を占める。

PLSの現況と役割

一九九四年十二月までに全ての準備を完了。一九九五年四月現在、スタッフ二十九名(うちアフガン人十一名、パキスタン人十四名、日本五名)、医師三、らい診療員二、理学療法士二、看護婦(士)三、医療助手四、ワークショップ三、厨房二、一般助手三、門衛二、事務二、検査一、運転手二名よりなる。

らい根絶計画全体の中の役割は以下のとおり、文字通りの中枢となっている。

① らい合併症治療サービス

現在入院設備四〇床、理学療法、再建外科、ワークショップなど、基礎的ならい合併症治療の機能のすべて備えている。州全体の投薬所(三十七カ所)の活動の大きな支えになっている。同時にPLS出現によって行政の枠を超え、アフガニスタン東部の患者にも恩恵が拡大、唯一の治療センターとしての役割が増大する。

② ワークショップ

予防用サンダルの配布を行っている。患者の変形防止策で重きをなす。月間一〇〇足を生産。その他の補助装具も作っている。

③ 訓練・教育のための支援

意欲あるスタッフや患者が再訓練や研修を希望する時は、積極的に支援する。また、PLS自身が小さな教育機関として機能している。いずれ小規模な学校組織を成し、次世代の育成を図る。

④ フィールドワーク

北西辺境州の中で最も無視されている地域に、集中的な定期フィールドワークを実施する。この際、殆どが無医地区であるので、らい以外の一般診療(結核・マラリア・腸チフスなど、感染症が主)と組み合わせて行う。

以下の地域が対象である。(一九九五年四月か

らチトラール北部の調査が始められた。)

(1) チトラール

マスツジからワハン回廊に至る諸溪谷(ヤルクン河流域)

ティリチ・ミール北部山麓周辺(トレコー地域)

バダクシヤン・ヌーリスタン(アフガニスタン)

隣接地域

(2) コーヒスタン

(3) デイール

(4) バジヨウル

(5) ワジリスタン

⑤ らい菌検査

PLS単独で北西辺境州全体の検査を引受けている。

一九九四年度(九五年三月のみ一カ月間記録あり)の実績は次のとおり。

外来診療数	564名
外傷治療	200名
入院治療数	31名
手術	31例
理学療法	
拘縮防止訓練	127例
ギプス治療	117例
サンダル・ワークショップ	
生産	102足
配布	10

ペシャワール会が関わり始めて十二年を経過、今やPLSの支援なしに北西辺境州のらい根絶計画は成立しない。今後もこの困難な地域に入ってくる団体はないと思われ、その重要性は増す。アフガニスタン内戦の終結によるアフガン人患者の増加、北部山岳地帯でのフィールドワークが拡大すれば、更にニーズが増すだろう。

数字に現れぬ大切な意義は、協力によって我々の存在そのものがよい協力関係を生み出していることである。少なくともこの分野で、ペシャワール会の動きは規模の割によく成功していると思われる。

アフガニスタン農村医療計画

ペシャワールのJAMS本部(病院)を中心にカブール避難民の診療が積極的に行われ、既設のアフガニスタン国内診療所、ダラエ・ヌール、ダラエ・ピーチに加えて、ヌーリス・ワマ地区に新たに診療所が開かれた。悪性マラリアに対するフィールドワークも継続され、担当地区ではマラリア流行の激減を確認した。

ヌーリス・ワマ診療所はJAMSの無医地区診療所の試金石と呼べるもので、ワクチン接種などを含め予防医学的な活動を始めつつある。

一九九四年度は、総数一七一、一九五名の患者が診療を受けた。全体として前年度の三%の伸びになっている。これは一つに、ペシャワール病院が多くのカブール避難民を診療したこと、二つめはヌーリス・ワマ診療所の開設による。殆どはマラ

1995年度の事業計画

リアなどの感染症、皮膚疾患、外傷(小外科)である。原則として新規の計画はない。質の充実が先である。目標を掲げると、

1. PLSの充実

これまでの経験から、北西辺境州における「らいコントロール計画」の弱点は(一)女性患者の診療、(二)ペシャワールに來れない遠隔地患者への治療・発見活動である。昨年度の事業計画に掲げた「らいセンターの再組織化」は、予期せぬ急回転で九四年度以内に実現した。ニーズに応じた自然な変化であるから、後は補給に応じて充実してゆけばよい。

今後の目標は、

- ①よい人材を育成・確保するため教育体制を充実すること。
- ②二三年以内にレントゲン・検査を備えた完全な病院単位とすること。
- ③そのために日本から人材(X線技師、検査技師、看護婦(看護士)、医師、事務)を派遣し、質の向上に努力すること。
- ④重点目標の地域に集中攻勢をかけ、しらみつぶしに北西辺境州・アフガニスタン国境地帯のらい患者等の早期発見を実現する。このため、一九九五年度はチトラールのマッスジ地区を当面のフィールドワークの目標に定め、偵察診療を開始する。

⑤らいの現地語(ペルシャ語・パシュトゥウ語)の一般むけアトラス出版準備を完了する。

2. ヌーリス・ワマ診療所

水力発電所を完成し、渓谷住民のワクチン接種を一九九六年度から可能にする。発電所は、既に工事が終りつつある。病人を出さぬ村づくりが目標である。本診療所の意義は「山岳無医地区の診療モデル」と呼ぶべきもので、JAMSの力量を問うものである。

3. マラリア診療

爆発的流行は峠を越えたものと見られるが、鎮静するまで同一地区の診療を継続する。



マッスジで巡回診療する中村医師

●1994年度診療実績

	外来診療数	外傷治療数	終検査数
JAMS 総計	141,186名	6,100名	120,393件
ベシヤワール病院	53,804	3,460	52,284
テメルガール診療所	18,564	208	10,815
ダラエ・ヌール診療所	34,211	556	25,053
ダラエ・ピーチ診療所	21,734	702	23,460
ヌーリストan・ワマ診療所	13,503	1,174	8,781
巡回診療総数(移動診療班)	2,634名	0	(記録なし)

ベシヤワール・一般外来と外傷を除く診療総数	21,983名		
妊婦・母親教室	14,255	鍼灸治療	3,816
手術数	755	歯科治療	2,229
入院治療数	928		

検査内容の内訳	*血液一般	便検査	尿検査	らい菌	その他	総計
ベシヤワール	9,195	10,574	8,380	281	23,854**	52,284
テメルガール	3,474	2,850	4,370	105	0	10,815
ダラエ・ヌール	8,415	9,367	6,966	0	305	25,053
ダラエ・ピーチ	8,291	7,891	5,732	0	1,546	23,460
ヌーリストan	1,878	3,422	2,431	2	1,174	8,781
総計	31,253	34,104	27,879	388	26,879	120,393

* 血液一般は、マラリア原虫検査をルーチンに含む。

**ベシヤワール病院「その他」の内訳

X線単純写・造影	8,466	肝機能など血清学的検査	3,652
腹部エコー	3,680	胃・食道内視鏡	2,219
心電図	1,947	病理組織診断	313
脳波	8	その他	3,569

●1994年度ワーカー・ボランティア派遣

1994年度は以下の人々がベシヤワール会を通じて派遣され、現地事業に貢献した。

氏名	職種	所属	協力期間
藤田千代子	看護婦	元福岡徳州会病院	1990年9月－現在
倉松 由子	理学療法士	元多摩全生園	1992年10月－現在
豊崎 朝美	事務	ベシヤワール会	1993年4月－1995年3月
松本 繁雄	検査技師	呂久光明園	1993年9月－現在(定期滞在)

95年度には、看護婦の小幡氏が数年の予定で参加。全体に現地事情になじんだ長期ワーカーが主体となり、安定した協力となっている。今後も継続的な人的協力が望まれる。

●1994年度中に 寄付をいただいた団体

赤坂幼児教育研究会
うら梅の協会
廣津ホラディファガイド
北九州アジアを考える会
熊本県精神保健センター
鞍手ライオンズクラブ
紅梅会 (福岡同窓会女子部)
国際ソロプチミスト福岡南
後藤寺小学校 PTA
埼玉医療生活共同組合
サンシャインガサールディアナヨガサークル
ししのごキャンプ
すみれ園
西南学院
西南学院高校
西南女子学院短期大学
西南学院中学
筑紫学園中学・高校
愛成会 東野産婦人科
名古屋瑞穂ロータリークラブ
ハルパーザ
馬場病院互助会
広島三育学院幼稚園・小学校
鶴城ライオンズクラブ
福岡同窓会
福岡歯科大学同窓会
福岡女学院 事務職員一同
福岡東南ロータリークラブ
福岡西ロータリークラブ
フライングレックス
富田ライオンズクラブ
林昌寺
南井上調剤薬局
悠久光明園
樹木キャンプ・2
熊本YMCA 国際センター
熊本ベシャワール会
久留米大学 法学部古賀ゼミ
古賀高校 緑グループ
国際ソロプチミスト北九州-西
札幌国際ソロプチミスト
喫茶 サイフォン
シオン山幼稚園
医療法人 静心会静内病院
駿河台予備校 市ヶ谷校
西南学院中学校3年母の会
西南学院高校後援会母の会
西南女学院大学
月の美術館
内船寺婦人部
新野内科クリニック
梅光女学院大学 宗教部
松原こひつじ幼稚園
ピーエムエスアイジャパン(株)
福岡女学院中学校高校宗教部
福岡女学院幼稚園
福岡徳洲会 JAMS の会
福岡ロータアクトクラブ
毎日新聞厚生事業団
明治記念館
労務システムコンサル
宇治徳洲会病院
勝手に支援会
熊本県産機
熊本県高校 国際教育研究会
熊本マリスト学園インターアクトクラブ
久留米大学 法学部
国際ソロプチミスト日田
札幌徳洲会病院
佐賀肥前酒造会鳥栖支部
滋賀医大 福祉保健医学講座
岡田保育所 保護者会
聖心会本部
西南高校インターアクトクラブ
西南女学院中学校
西南学院大経済学部1ーにクラス
西南幼稚園
東郷信愛幼稚園
名古屋サウスライオンズクラブ
計根区ベシャワール会支援有志
馬場病院とB.B.ゴルフコンペ
駒ひろし車庫センター
福岡女子短期大学
福岡女学院同窓会短大部会
福岡中央ウィズメンズクラブ
福岡西ロータアクトクラブ
福岡YMCA
八尾ベシャワール会
尼崎バプテスト教会
神戸多聞教会
在日大韓基督福岡中央教会
日本基督教団 津屋崎教会
鳥栖キリスト教会婦人会
バプテスト東福岡教会
聖ヒンセンジョー・パウロ会
福岡ベトナム村伝道所
日本キリスト教団八幡坂町教会
香住ヶ丘バプテスト教会
小倉バプテスト教会
西南学院バプテスト教会
天神聖霊集會
長久教会婦人部
赤八幡キリスト教会
福岡聖書研究会
福岡南教会
木血キリストの教会
佐賀めぐみ伝道教会
大名町カトリック教会
東郷教会 教会学校
日本聖公会 福岡教会
平尾バプテスト教会
福岡筑紫野伝道教会
日本キリスト教団幕張教会

●1994年度ベシャワール会会計報告

一般会計

[収入の部]

1. 会費及び寄付①	44,725,204
2. 団体指定寄付②	1,980,000
3. 事業収入等 ③	240,000
4. 利息雑収入	210,116
計	47,155,320
マリア基金繰入れ	3,200,000
前年繰越	12,271,049
合計	62,626,369

[支出の部]

1. 現地活動費	48,334,155
1) JAMS運営費④	36,143,838
2) PLS等運営費⑤	8,265,137
3) 渡航通信費⑥	2,367,945
4) 国内活動費 ⑦	1,557,235
2. 広報費	2,407,856
3. 事務局費	2,696,626
計	53,438,637
次年度繰越	9,187,732
合計	62,626,369

特別会計

I 外務省NGO補助事業

[収入の部]

1. 外務省NGO補助金	8,000,000
計	8,000,000

[支出の部]

1. JAMS本部運営費	8,000,000
計	8,000,000

II 国際ボランティア貯金配分事業

[収入の部]

1. 国際ボランティア貯金配分金	21,062,000
計	21,062,000

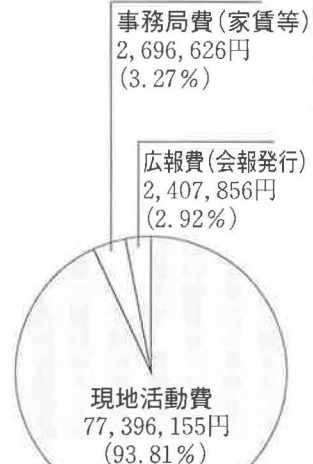
[支出の部]

1. アフガン内診療所運営	21,062,000
計	21,062,000

- ①個人(3)寄付、団体(2)寄付
- ②一団体による助成金
- ③書籍、絨毯売却
- ④JAMS医薬品、医療機器、人件費等
- ⑤PLS・MHP医薬品、医療機器、人件費等
- ⑥スタッフ渡航費、国際電話
- ⑦国内研修費用、講演旅費等

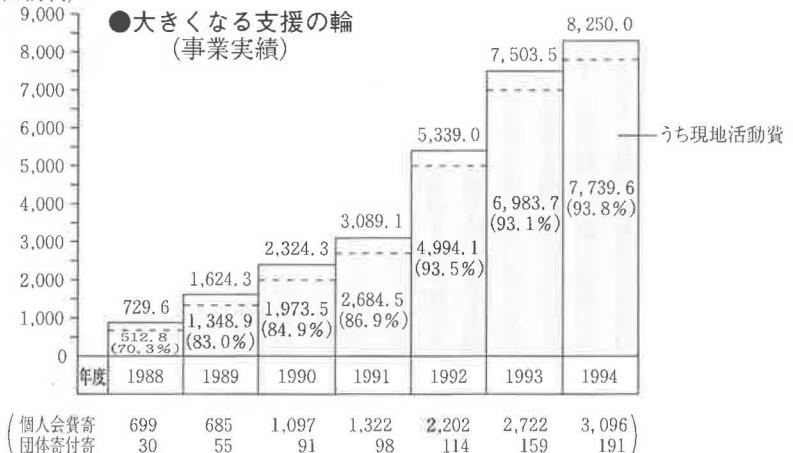
'94年度会計報告

●1994年度事業額 (支出ベース) 82,500,637円



単位(万円)

●大きくなる支援の輪 (事業実績)



チトラールの娘たち

マスツジの巡回診療

PLS(ペシャワール・レプロシーサービス看護婦

藤田千代子

皆様お元気でしょうか。

この六月に、ドクター中村曰く「人さらい」と「薬運び」の目的で北西辺境州北部のチトラールに行きました。朝七時前に薬品・医療器具、マットレス(スタッフ用、チトラールでは高価なのでペシャワールで購入)、野菜などを積み込んで出発しました。

道路塞がり引き返す

予定ではその日の夜までにチトラールまで行き着いて、翌日目的地のマスツジへ行くはずでしたが、ディールのテメルガルで食料品の残りの買い出しをしました。いよいよロワリ峠へ向かい山道が始まると、すぐ目の前に脱穀機が横転しており、道を塞いでいました。峠から下つてきた人とディール側から上ろうとする人が、見るみるうちに集まってきて、機械を起こそうとしたり、脇に寄せようとするけれど、三十分しても効果がありません。峠越えが暗くなるのと、チトラール着が夜中になるので、結局ディールに引き返して一泊することになりました。

四月に来たときは、もう少し前方の所で崖崩れ

があり、道路ごとそぎ落とされていたため、車両が通行止めとなりました。このときもディールに引き返して一泊し、翌日徒歩で積雪のロワリ峠を越えてマスツジに行くチームと、ペシャワールへ引き返すチームに別れたのでした。本当に何が起きるかわからないものです。

買い出しは男の仕事

先にテメルガルでの買い出しのことを述べましたが、いかにも女性である私やもう一人の女性が走りまわったように聞こえるかもしれません。しかし私達は車の中でボーッとしていたり、少しバザールの中を歩き回ったり、空腹のためにチャイハナでつまみ食いをしていただけです。

スタッフはなれた手付きで野菜や果物を選び店主と交渉しています。ここでは買い物はほとんど男性がします。それにしてもスタッフは、四月にチトラールに来たとき、野菜に限らず、マスツジで仕事をするために必要なものの値段を、ペシャワール、テメルガル、チトラールのうちでどこが安いか一つ一つ調べてきていたので驚きました。今回のメンバーは、JAMSのアーベット(看



PLSの患者を診る藤田看護婦

護士)、アミール(カメラマンでありコックであり、要するに何でもできる人)、ワヒデウラー(検査技師)、PLSからサイド医師、モハammad・ヒダヤットラー(らい診療員)、藤田(看護婦)、安井さん(女性カメラマン)そして中村先生、ドライバーでした。

違う国へ来たよう

ところどころに残る雪渓を切り開いた道を三時間半かけてロワリ峠を越えチトラール側に入ると、同じパキスタンというよりチトラールという別の国へ来たような感じを受けました。

ペシャワールで見慣れた彫りの深いごつごつしたパシトゥン人の顔でもなく、JAMSのスタッフのように少しはなやかさをそなえた顔でもなく、表現しにくいのですが、顔や体格までかなり異なるのです。言葉もチトラリーと言いい、ウルドゥ



マスツジでの巡回診療風景

語、パシュトゥ語とは全く違います。

さらに北上し、マスツジへ近づくと、私達の車とすれちがう男性や小さな男の子が片手を上げ（手をふるのではない）挨拶をする。知人が来たからではなく、誰にもそうする習慣のようです。とくに小さい男の子に、スタッフがどの人にもするように、挨拶を返すのをみるのは、気持ちいいものです。一年ぶりのマスツジでした。

スワト地方の約二倍ほどもあるチトラール地方にらいの投薬所が三ヶ所しかなく、その最北地がマスツジであり、アフガニスタンのワハン回廊との国境までずいぶん距離があります。

マスツジにいらる診療員は、「北部には必ず未治療のらい患者がいると確信しているが、道路

事情の悪さに交通手段がないこともあり、どうにもならない」と言っていました。

人口のまばらなせいなのか、イスマイリ派という違う宗派のせいなのか、ペシャワールやカラチからあまりにも離れているせいなのか、事情はよくわかりませんが、マスツジはまるで見捨てられているように見えました。せめてバイクぐらいは支給されるべきです。二年前カラチから北西辺境州へ二、三十台のバイクが送られ、ミツシヨン病院のらい病棟の庭に並んでいたのを思い出しました。

この道路事情を、PLSで働くアフガン人の医師に話したところ、彼は真顔で、「そういうところなら馬を使つたらいい、馬なら山でも谷でも使える」と答えたのを覚えています。

幼い娘たち

翌朝早起きすると（起こされて）、遠くに雪をかぶったテイリチミールが、雲一つない青空にくっきりと見えています。役得だなーと思うひと時です。

今日はいよいよ「ひとさらい」（中村先生元談）に行きます。マスツジで仕事を始めるため、地元の人をペシャワールのPLSでトレーニングし、再び地元で働いてもらおうという計画です。今回は女性二人の候補があったので、会いに行きペシャワールに連れて帰るのです。ヌール・ペーガム十六才。三人姉妹の長女で、私と二人きりで話しをする時とても恥ずかしそうにして、ドバタ（パール）で顔を隠してモジモジしています。し

かし意志ははっきりしており「ペシャワールで病院の仕事を覚えたい」と言いました。

ビービー・ハミダ十五才。六人姉妹、二人兄弟の真ん中あたり。体格、精神的成長がとも十五才に見えない。思わず「こんなこどもを連れていくのだろうか」と胸が痛む。どう見ても十五才には見えないが、卒業証書はそうなっています。スタッフの話では、「親が年令を間違えて入学させてしまったのだろう」ということでした。しかし、本人の意志はペシャワールにあり、まあなんとかなりそうだと思うざるをえませんでした。

両方の母親に会うと、やはり娘一人遠いペシャワールにやるというので心配そうです。イスラム教国ではなおさらのことでしょう。結局両親の了解を得て、二人ともペシャワールに行くことになりました。

翌朝、中村先生たちは、ワハン回廊とチトラールの国境にあるバローゴル峠をめざし、さらに北部に向けて診療をかねての調査に出発。サイード先生、安井さん、私は、一日の休暇をもらい、シャンドール峠へ行き、高原のような峠を散歩したり湖に映る雪山を眺めたりしてのんびりとすごしました。

翌日、私達と一緒に住んでPLSでトレーニングを受ける女の子二人を連れて、ペシャワールへ帰りました。

こうして私達の最初のフィールドワークが始まり、いよいよ念願の地域に足を踏み込むことになったのです。成果の上がることを祈らずにはおられません。

「幸せだから太ったんだよ」

PLS理学療法士

倉松由子

「太った王様」の話

五月頃、PLSのあるスタッフが前よりふくよかになってきたようだと別のスタッフと話していたとき、「あの人は最近いいものを食べているんじゃない。」と私が軽い気持ちでいいました。すると彼はまじめな顔をして、「シスター、そうじゃないよ。何かいいことがあったんだ。幸せだから太ったんだよ。人間が太ったりやせたりするのは食べ物がないからではなく、心の状態によるんだ。僕がもっている、昔本当にあったことを書いた、ためになる本にこんな話がある。」といって次のようなお話をしてくれました。

『大変太った王様がありました。普通の大きさの椅子には坐れなくて、特別に大きな椅子を作らせる程でした。王様はやせたいと思って国中に自分をやせさせてくれる治療師を求めおふれを出しました。えらい博士や有名な医者がたくさん集まってきた、それぞれ治療を試みましたが、王様をやせさせてくれる人はいませんでした。』

お城の前を通りかかった一人の乞食坊主が治療師たちがつかけているのを見て、「あれは何事

ですか。」と尋ねました。わけをきくと「わたしがやってみましょう。」と受付の大臣に会いましたが、みずばらしい身なりをみて大臣は相手にしませんでした。その後も相変わらず王様はやせることができません。大臣はふと乞食坊主のことを思い出し、王様に話しました。王様が会ってみようと言ったので連れてこられました。乞食坊主は「三日間お待ち下さい。家にあるすぐれた医学書に治療法が書いてあるので、それを読んで研究できます。」といって立ち去りました。

三日後乞食坊主は王様に会々と、「あの医学書によると、あなたは一ヶ月後には死んでしまうでしょう。」と言いました。王様は驚いて乞食坊主を牢に入れ、非難にくれて悩み苦しむ、夜は眠れず、食事ものを通らなくなりました。

一ヶ月がすぎですっかりやせ細ってしまった王様は、「一ヶ月たっても死なないでいるではないか。あの乞食坊主の言ったことは間違っていた。あいつの首をきってしまえ。」といいました。刑場にひかれていっても乞食坊主は平然としていて、死ぬ前に何か望みはないかとときかれて「王様にも一度お会いしたい。」といいました。それを伝

えると、王様が了承したので、面前につれていかれました。乞食坊主が「どうして私を死刑にするのですか？」ときくと、王様は「お前が私の命はあと一ヶ月しかないといったのに、それが間違っていたからだ。」と答えました。すると乞食坊主は「王様は今、私のことばのおかげで自分の望み通りにやせてしまったではないですか。」と言いました。王様は「あつ。」と驚き、納得して、彼にたくさんのお金をやり、さらに王女を嫁にやりました。』

六月になって、入院患者数は二十五人位、その中には、お父さん・お母さん・長男・次女がらい患者に新登録された一家もいます（お母さんは美人でお父さんはハンサム）。以前に入院していた患者の親せきが、話をきいてアフガニスタンの



患者さんと対話しながら治療する倉松さん



PLS スタッフと倉松さん

山奥からやって来たのです。早期に治療を始めたので、きちんと薬をのめ続けられ、後に障害を残さずに治るでしょう。女性のらい患者も常時四人入院するようになり、一緒に手足の運動訓練をしています。また、元らい患者でPLSの看護スタッフになった青年が、自分の経験を生かして、男性のグループ訓練を担当してくれています。

先日、ポリオで左足がマヒしてしまった三才の男の子が治療が終了した元らい患者のおじさんに連れられて入院してきました。靴と装具、そして家庭でできる運動訓練をするように、中村先生から処方が出ました。小児の経験がない私でも、基本がしっかりしていれば応用がきくのでしょうか、日本で働いていた頃の不勉強がたたっています。ペシャワールにあるミッション系の障害児施設の装具科や靴ワークショップの親方に助けてもらって、町をみるのはじめて、車に乗ったのもはじめてという男の子の手助けになれるよう試行中です。

二ヶ月の見聞で多くの必要^{ニーズ}性を痛感

PLS看護婦

小幡順子

四月十四日、イスラマバードに向かう途中、窓からカラコルム山脈がみえた時、“やって来たんだ”という実感がした。昨年十月にパキスタンがどういう所かも知らずに見学にやってきた私には、日本を離れて、十数時間でこの様な雄大な風景と出会えるとは思わず感動したのだが、今回はやや緊張した気持ちでながめていた。北京から隣に機乗してきたパキスタン人は三ヶ月間中国でエンジニアの仕事をしていたという。彼がイスラマバードに着陸したと同時に、“ウエルカムトゥパキスタン”と私にはほほ笑んでくれた為、おぼえてのあいさつで“シュクリア（ありがとう）”と答えた。これが初めて使ったウルドゥ語だった。到着してから四月中はラッキーな事に、異常気象らしく雨が降り、すずしい日が続いたが、さすがに五月に入ってから徐々に暑さが増し、ここ一週間前頃より、常時汗がジワジワとにじみ出る様になってきた。ちなみに五月初旬に日中温度計を外においてみると最高値の五〇度まで達していた。ただ湿気がない為に思った程すこしくいという感じはしない。

病院は普段は、朝八時に始まり午後五時頃に帰

ってくる。月一回の割合で休みを取っている。夜勤者からの申し送りの後、回診が始まり、傷のドレッシングの後、それぞれの仕事へと別れてゆく。回診の時、若い女性は恥しそうにドバタ（頭から上半身を覆っている布）で顔をかくそうとするが、目と顔の一部分は計算されたかのように少し出していて、かえって色気を感じてしまう。“あのテクニクが私にもあったら…”なんて回診中不まじめな事を考えたりしている。こちらの女性は、まだ子供と思える子でも笑顔が色づいていのだ。

もっと楽しくなるだろう

こちらの人は、美的感覚の良し悪しは別として、又、貧困の差で物の良悪はあるとしてもみんなそれぞれにおしゃれだ。全身を覆った黒い布の下には華やかな色彩の洋服（シャルワル・カミーズ）であったり、装飾もハデである。人の物も気になる様子で、私の白衣の下に着ているシャルワル・カミーズを手にとっては、“あゝだ、こゝだ…”といった楽しんでる様子。言葉がわかるともっと楽しくなるだろうと思う。言葉については、中村先生は、何回も“言葉はだいじですヨ”とい



募集

長期ボランティア

「共に歩む」ワーカーを!!

PLS と JAMS では日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象:

医療技術者(医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など)。又は事務関係者で外国語(英語又は現地語)の堪能な者。

② ワーカーは、現地で1カ月、ヘルシャ語またはパシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしていただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを支給します。

④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。(繁忙期には断ることもあります)詳しくは、ペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号 ペシャワール会
電話 092-731-2372
092-725-3440(分室)

われ納得はするが、行動が伴わない。努力にかけろ。三人のワーカーの内が一番勉強の必要がある私が一番熱心ではない様だ。反省、反省。

先日、午後から二日間時間を取り、レブロシーテクニシヤンのヒダヤットと、藤田さん三人でペシャワール市内の患者さんの家にフィールドワークに出かけた。病院外での仕事は初めてで、こちらの生活状況や、患者やその家族へのコンタクトの仕方など学ぶことができた。思った以上に時間を要し、一度に多くをまわるのは困難だが、数軒まわっただけでも、フィールドワークの必要性を感じた。私と藤田さんは女性がいる所へ通され、ヒダヤットは、女性がいる所へは通されず、別の場所男性を診る。泥で造られた家は、思った以上にすずしかった。

らしいについては、体のチェック診断など、いろいろむずかしそうで、これからの事を考えると不安でもある。

あつという間に二ヶ月がすぎたが、そろそろ

がんばってみてもいいんじゃない」と、自分にいきかせている今日このごろである。

〈メッセージ〉編集部の皆さんへ、おつかれさまです。あと1ヶ月したら博多では「山笠」でにぎわうんだろなあと考えながら書いていました。私は山笠だいたすきの、「のぼせもん」で、毎年見に行っていたんですヨ。こちらに来る時も、「四月に行こうか、山笠をみながら行こうか」なんて、考えていたんですから…。あの「おしりの形がなんともいえずいいですネー」。「おしり」といえば、こちらでは、イード前まで、羊たちが「もこもこのおしり」をプリプリふりながら歩いているのがみょうにかわいかったのですが、みんなイードで食べられちゃったのかしら…。今は、町をあまり歩いていないのです。……私ってヘン?



PLS で診察するサイド医師

今度は一人の医師として 訪れてみたい

九州大学医学部五年生

永田高志

春休みの二週間、私はペシャワールの中村哲先生のもとで勉強する機会に恵まれました。私は中村先生の出身校でもある九州大学医学部の五年生で、熱帯医学研究会というところに所属しています。顧問の教授の紹介でペシャワール会と中村先生のことを知りました。皆様の御好意で今回の運びとなりました。

家族的な雰囲気の中で

ペシャワールでは滞在中の大半をPLSで過ごしました。十一月に発足したPLSでは優秀なスタッフも集まり、活動の方も軌道に乗ったようでした。中村先生はじめスタッフ一同、家族的な雰囲気の中で生き生きと働いているのが、とても印象的でした。スタッフと一緒に先生の回診に参加したり、らい患者さんの傷のケアや手術も見学しました。人手が足りないときは、私も手伝いに入りました。おかげさまで患者さんやスタッフの人とも仲良くなることができました。大学病院では決してできない貴重な体験実習ができて、実り多い二週間を送ることができました。

私は、中村先生を取材にきたフリーのカメラマンと一緒に、スタッフハウスで日本人ワーカーの方と寝食を共にしました。皆さんとても明るく気さくで、夕食のあと雑談するのが何よりも楽しかったです。現地事情から患者さんやスタッフのことからオウム真理教のことまで、話題は尽きませんでした。

身近なところで接して実感したのですが、日本人スタッフの方は素適な方でした。看護婦の藤田さんはベテランだけあって、現地の医療スタッフを上手に取り仕切っていて、ある意味では中村先生以上です。バザールへの薬品の買い出しや女性患者さんのケアでとても忙がしそうでした。

理学療法士の倉松さんにはとてもお世話になりました。倉松さんのおかげで、スタッフや患者さんともうまくコミュニケーションがとれました。飾り気のない倉松さんの人柄がとても好きでした。

検査技師の松本さんには頭が下がる思いです。七十才を過ぎて仕事に打ち込まれる姿を見て、軟弱な自分を恥じるばかりです。私の滞在中体調を崩されていたようで心配です。

中村先生も、PLSの事が一段落したせいか、とてもお元氣そうでした。暇な時、私はPLSのラボで勉強していたのですが先生の部屋へ質問に行くと、「まあ、お茶でも飲んでですか。」と言われ、つつい長居してしまいました。

今の気持ちを忘れずに

このように、皆さん健全な心の持ち主であり、そして普通の平凡な人達でした。現地のスタッフや患者さん、ペシャワールの街の人々にも同じことが言えます。「結局人は人なんだ」という、極く当たり前のことなのですが、それがわかったことが、私には一番の収穫でした。将来医療に携わる時も、この気持ちを忘れずにいたいと思います。現在は、再び日本で日常生活の忙しさに追われる毎日で、ペシャワールのことも遠い思い出のように思えます。しかし縁あらば、今度は是非一人の医師としてペシャワールを訪れ、働いてみたいと思います。

最後になりましたが、中村先生、ペシャワール会事務局の方をはじめ、お世話になった皆さま、本当にありがとうございました。



日本の「ドウギ」で現地青年と記念の一枚

着実に根をおろすPLS

●ペシャワールからの手紙

JAMS顧問医師・PLS院長 中村 哲

実戦部隊を養成

お元気でしうか。ペシャワールに戻ると日差しが強烈です。暗い部屋から屋外に出るとめまいがします。例年なら夏は「休戦状態」で病棟が閑散としているのですが、今年はまだエアコンも入れてないのに、予想した程には減る様子がありません。PLSの仕事が着実に根を下ろしているのを感じます。現地スタッフと日本人ワーカーが一体になって、よく仕事が組織されています。

現在の病棟の大きな目標の一つは、若いスタッフたち（たいてい高校生程度の年齢）の訓練です。藤田看護婦や中堅の現地らい診療員・医師が意欲的に取り組んでいます。これは、現地でも実戦的でない診療をする医療ワーカーが大変少なく、多少学歴を身に付けてしまうと手を汚す仕事を嫌がる傾向が強いからです。信じられないでしょうが、何と「らい診療員」の資格者さえしばしばそうなのです。結局、「自分の手で実戦部隊を養成するほかなし」というのが十年後の結論で、遠回りのようでもこれが最善です。わが生徒たちは実に生き生きとして、先を思えば頼もしいものです。

彼らの瞳の輝きがある限り、この事業は安泰です。現在四名を訓練中で、フィールドワークを予定しているチトラール現地から更に若干名を加え、少しずつ軌道に乗りつつあります。

JAMS百名に比べて、PLS三十名という小さなグループですが、同様に一種の矜持と明るさがみなぎっています。この十数年、パキスタンやアフガニスタンでも内乱・テロ・インフレなどの暗いニュースがあふれる中、すがすがしい健全な活気があります。

マストウジ地域（ヤルクン河流域全長一一五キロ）への医療活動の方も、着々と準備されています。同地は、ヒンズークッシュ山脈の最高峰ティリチミール（七七〇八メートル）の北部山岳地帯で、北辺チトラールの中でも僻地中の僻地と言われる所です。当然、医療関係者は誰も行きたがらず、らいの調査は皆無です。四月に既に調査が始まり、六月中に中継基地がおかれます。

嬉しいことを付け加えますと、アフガニスタン国内に置かれたJAMS診療所付近から、ロコミでらいの早期患者が続々とPLSに来てくることです。初めは長大な渓谷を前に、正直戸惑いを覚



オペ中の中村医師と藤田看護婦

えましたが、三年にしてようやく効果が現れてきました。中にはバザールでうちの警備員から知らされて自発的にきた者もいます。人々はよく見ています。実際の良いサービスと「地元の協力」がいかに重要か、改めて思います。

悪性マラリア流行の兆きざし

JAMSヌーリスタン・ワマ診療所の方は、間もなく発電設備を備え、冷蔵庫が使えるようになります。つまりワクチン保存ができ、全渓谷で接種プログラムが可能になります。このために急流に水路を開く難工事に力を入れてきましたが、実現に向けて確実に一歩が踏み出されたことになりました。

改めて思いますと、JAMS/PLSの活動は実に多岐にわたります。教育、装具ワークショッ



PLS スタッフ一同そろっての夕食

プ、土木工事、防衛隊、住民との折衝、発電設備の建設、フィールドワーク用車両の修理場と、基本的な機能の整備があり、不動の安定感を与えていると言えます。

新しく送られた車両二台は一週間前、無事手元につきました。強奪された車両のうち一台は奪回されて修理中です。ポンコツ・ジープの奪回にエネルギーを費やす事を不思議がる方もいると思いますが、山岳地帯の孤島ともいへば診療所にと

って「輸送」が一つの生命線だという実感が日本の方々にお分かりでしょうか。八台のジープはフル回転です。治安悪化の中をくぐる独力輸送は並大抵ではなく、住民の支持を背景に武装集団の脅しに対しても断固たる態度で臨み、何とか確保できております。それがまた、地元住民との絆を深めていると言えます。

なお、今年は雨が多かったせいか、グラエ・ヌールを中心にマラリア発生が急増しています。今年の傾向は悪性マラリアが初めから多数見られる事です。二年前おそらく一万名を下らぬ犠牲を出した大流行を考えると、不気味な兆候です。他方、ヌーリスタンでは Dengue 出血熱と思われる病気が流行、少なくとも五十名が死亡しました。こちらの方は犠牲者はすくないのですが、原因が明らかでなく「黒い斑点が出て死ぬ」という噂が広がり、すぐにも直接現地で調査・対策にのりだす予定でおります。

忙しい夏になりそうですが、皆様もどうぞお元気で。

六月四日 中村 哲

▼未使用の切手・ハガキを！▲

*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。

(古切手は扱っておりません)

表紙をめぐる小さな物語 7

甲斐大策

ザリーフの絨絨屋

雨は一〇米先がすすむ程の降りだが温度は変わらず、湿度だけがハマム(蒸風)並みに上る。グラーは、大きな買物を期待出来る客のためにしか用いない。

「……え？ グラムいくらだった？ ……そっちでも同じだろう……そう、そういうこと。カラチ？ 毎年だからね、何とか切り抜けたよ。」
雨期直前の猛暑が、ムハジール(移民)とカラチの土地っ子をかり立て、殺し合いをやらせる。「ムハジールもスインディも、金持ちは大人しいさ……」

カラチの製油所までローリーを転がして戻ったハナカイが、アブダビで働く弟と電話中である。嫁入りの長女に純金の腕輪の二、三本は持たせた、このところあちこちと値踏みに忙しい。

難民達はザリーフの絨絨屋を連絡と昼寝の場とし、電話局代わりにもしている。ザリーフは茶や飯を供し、同郷者達に尽くしているように見える。しかし、小銭貸すにも利息を計算し、車は貸貸し、絨絨運びもやらせてしっかり利を得ている。それでこそザリーフ、と誰もが納得するのである。

電話を終えたハナカイにザリーフがにじり寄り。「ハナカイ・ジャン、ほれ、この腕輪。先月、金の安い日があつたらう、あの日の値でいいよ。五个あるけど……どう？」

密輸入自動車転売の手数料を受取りにきていたハリス派のコマダン、ダウド・ハーンは表情も変えず上を見て艶をしごく。

天井の隅にヤモリが貼りついて動かない。

●事務局だより

*今年も中村先生が無事帰国された。フィールドワークを行ったチトラーの強い日差しで、二回顔の皮が剥けたとのことだが、陽に灼けてお元氣そうである。先生によると、今回のマスツジからワハン回廊にいたる溪谷、ヤルクン河上流はヌーリススタンが箱庭に見えるほど広大な地域で、マスツジからボローゴル峠までは徒歩で五日の距離になる。四輪駆動での運行は無理で、驢馬だと水を怖がるため馬が最適かつ必要という。車だけでなく、馬も飼わなきゃいけないというのは大変そうですが、なにかもが瞬時に移動する、高度情報化社会の日本から見ると、なんかいいですね。

*PLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) は着実に現地に根付いているようで、自前の治療センターとしての威力を遺憾なく発揮しつつあるようです。中村先生も書きになっていくように、アフガン情勢が不透明なうえに、パキスタン政府の、難民に対する対応がシビアになりつつあるなか、政府公認のPLSの存在は、きわめて重要かつ力強いものになっていきます。現地スタッフはもちろん日本人ワーカーの健闘を祈ります。

●絵葉書を作ります

*ペシャワール会で絵葉書を作るようになりました。会の存在をより広く知っていただくためと、収益を活動費の一部に当てるためです。

絵葉書は二種類作ります。一組はカラーの写真五枚組で、題して「ペシャワールの祈り」パキスタンの風物や子どもたちの写真と中村哲医師の診療風景が一枚です。撮影はペシャワール会の理事の美奈川成章弁護士です。もう一組は会報の表紙を描いていただいている甲斐大策氏によるペン画。題して「ペシャワールへの道」で、アフガン、ペシャワールの世界を細密に描いた五枚組です。(9月出来上がり) それぞれ販売価格は五百円です。(送料は九組セットまで一律百九十円、十組セット以上は送料不要。講演会等での販売もよろしく願います。)*入会案内の新しいパンフレットが出来上がりました。会員の拡大のためにご活用いただきたく、必要枚数をお知らせ頂ければお送りいたします。*中村先生は、毎年七月九月中旬と十二月中旬〜二月は日本に帰国されています。講演会をご計画の方、グループは早めにお知らせください。

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢 日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセー

石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五
電話 〇九二(七二四)四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五
電話 〇九二(七二四)四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価二一〇〇円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二丁目一四
電話 〇三(五六八七)二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE (〒八二〇 福岡市中央区大名一丁目一〇、二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二 三七二二) 内におく。

発行所 ●ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号 毎週水曜日夜七時より例会(参加自由)

☎・FAX (092) 731-2372

郵便振替 福岡9-6559

[分室] ☎・FAX (092) 725-3440 (石風社内)

発行日 1995年7月22日 No. 44

会長 高松勇雄

事務局長 村上 優

名誉会長 間田直幹